

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣

#### 帰国報告

最終報告提出日：2011年10月18日

報告者：空 由佳子（西洋史学）

研究テーマ：フランス・ボルドーにおけるエリートと貧民救済1750年～1830年）

#### 派遣先での活動

##### (1) 派遣機関

大学名：ボルドー第3大学（フランス・ボルドー）

学部学科：文学部

研究科専攻：歴史学科博士課程

受入教員：Michel Figeac

##### (2) 派遣期間

期間：H22/9/1～H23/8/31

#### 主な研究成果

##### (1) 当初の計画の概要：

近代フランスにおける政治及び社会の変化について、社会保障制度の歴史を通じて考察することを目的とした研究を行っている。パリから自立した地方都市であるボルドーを対象とした個別研究により、上記のような歴史研究上の一般的目的を達成したいと考えている。歴史分野ではまだ少ないフランス本国での博士論文執筆を実現するため、ミシェル・フィジャック教授の指導の下、ジロンド県古文書館及びボルドー市古文書館での史料調査を引き続き行い、論文執筆に取り掛かることを目的とした。

##### (2) 実際に達成された成果：

前半は史料調査の継続及び分析の作業に集中した。旧体制、革命、帝政、復古王政という時代の転換期を取り扱うために質の異なる史料を調査しなければならなかった。

教会及び行政の史料は、多様な情報が含まれた史料群を形成しており、そこから必要な史料を探し出す作業を行った。教会・中央政府・地方行政の史料をまとめて調査することで、教会と国家の関係が地域社会に与えてきた影響を測ることができた。

また、まだ体系的に調査されていなかったボルドー救貧施設の議事録を1世紀分調査することで救貧施設の活動とその進展を探り、ボルドー周辺の共同体の状況と比較することで、ボルドー地域全体における救貧活動の機能を検討した。

さらに、エリート層の宗教観と実践の変遷について遺言状の分析を行った結果、一般に言われる世俗化には地域や階層による差があることが明らかになった。

史料調査終了後は、史料から得られた情報と先行研究を再度見直す作業を行った上で作成した博士論文の詳細なプランを指導教授に提出し、博士論文執筆に取り掛かった。

### (3) 今後の研究展望

歴史研究の主要な作業である手稿文書の調査には、膨大な史料を読みこなし整理していくだけの十分な語学能力が不可欠であるのみならず、調査自体にも長い時間を要し、このような研究上の困難ゆえに、西洋史学の分野で、博士論文をフランスの大学に提出した例はまだ少ない。しかし、フランスで認められる研究を残し、フランスと日本を学術的に結びつける意味は大きいと考えている。それゆえ、引き続き在外研究を行って**2012年**に博士論文を提出し、更にフランスと日本両国での研究報告及び論文化を実現していきたい。